

障がいを理解するための「絵本」制作の試み (第6報)

—「ちがい」の理解について—

平林 あゆ子

Making a Picture Book to Promote Understanding of Children with Disabilities (VI) : The Effect of the Picture Book for Understanding of the Differences

Ayuko HIRABAYASHI

1. はじめに (問題と目的)

2006年12月に国連で「障害者の権利に関する条約 (障害者権利条約)」が採択された。それらの教育条項は誰をも排除しない教育制度として、インクルーシブ教育を原則としている。日本の教育界では、特別な支援を必要とする幼児・児童・生徒への「特別支援教育」の取り組みが2007年4月から始まった。「障がいの有無に関係なく共に育ちあう」というインクルーシブ保育・教育が広がる中で、障がい児と健常児の相互理解の工夫が求められている。筆者は障がいを理解するための絵本 (以後「絵本」と記す) を制作し、相互理解の取り組みを2002年からすすめている。小児科医や保育者、保護者、学生などと協力して障がいに関する「絵本」を制作し、現場での活用を試みてきた。教育・保育の場における「絵本」の読みきかせにより、特に保護者の障がいに対する理解が進み、親同士の歩み寄りができたという実態が明らかになってきた。「絵本」は、子どもに活用されることはもちろん、大人も含んだ障がい児の周辺に有効に活用されることを期待している。

「絵本」制作の目的は、「絵本」により子どもたちや大人が「障がい」や「ちがい」の理解を深めて、インクルーシブ保育・教育を促進することにある。筆者は「絵本」制作と同時に主に「絵本」を通して障がい理解と人間理解の深化を目指した実践の構造について「絵本による障がい理解の基本概念 幼児期」という仮説を考案した。制作した「絵本」(現在20冊以上) を使って幼児教育の場で実践した結果、基本概念の仮説は現実にあったものの確信を得たので第5報で報告した。

本稿の前に発表した論題は第1報では当面の制作した絵本についての紹介と考察、第2報では「障がい理解」の実践と本質をテーマに、幼児教育を担う学生に対する「絵本」を使った教育プログラムの実践と、障がい理解の基本概念の仮説を考案し図式化した。第3報では研究の進展に必要と思われる基礎的な資料として、保育所における障がい児の実態について調査し考察した。第4報では自閉症をテーマとしている絵本『たっくん』の幼児教育の現場における読みきかせ効果と、保育者の意見、障がい児・小児神経医学などの専門家の意見を質問紙やインタビューにより検討し考察した。第5報では、基本概念図に現在までに制作した「絵本」名を入れて報告し、さらに制作した絵本の内、ダウン症児の家族の気持をテーマとし評価が高かった『たいせつなあなたへ』の幼児教育の場における読みきかせ効果と、保育者や専門家の感想や意見を検討し考察した。

本稿では、「ちがいが」の理解をテーマとして制作した『ひとりぼっちのもにゃ』の読みきかせ効果を検討し考察したので報告する。障がいの理解には、まず自分と他の人々との「ちがいが」というものに気づいた上で、人としての本質は変わらないと理解することが必要であり、それが人間理解の深化に繋がると考えるからである。

2. 「絵本」の効果について

2.1 方法

2.1.1 「絵本」の制作

「絵本」は、保育士志望の学生、保育者、障がい児の保護者らと共に制作している。それらの絵本を内容、表現力、完成度等で評価した。評価者は小児科医、保育者、保育士志望の学生、障がい児のいる家族と筆者である。「絵本」は、保育士志望の学生、保育者、障がい児の保護者らと共に制作している。ここでは、「ちがいが」や「少数派」のいじめがなぜ起こるのか、仲間はずれはなぜ起きるのかをテーマとして制作した『ひとりぼっちのもにゃ』を紹介する。

2.1.2 幼児への「絵本」の読みきかせ効果の測定方法：2010年にA保育所（名古屋市内）B幼稚園（岐阜県内）C幼稚園（岐阜県内）、2011年にD保育所（名古屋市内）での絵本の読みきかせを行った。その園児らに読みきかせをした後に園児らの印象についての描画とインタビュー、そして園児との問答や保育士へのインタビュー及び質問紙を実施したが、園児らの印象についての描画は、実施した園と実施の機会が得られなかった園があり、分析対象としては結果を掲載しなかった。

（1）A保育所（名古屋市内）は障がい児がいない年長クラスで、その園児らに読みきかせをした後に園児らの印象についての描画とインタビュー、そして園児との問答や保育士へのインタビュー及び質問紙への回答を検討した。

（2）B幼稚園（岐阜県内）は障害児が多数いる園で、その園児ら（年中クラス）に読みきかせた後に園児らの印象についての描画とインタビュー、保育士へのインタビュー及び質問紙への回答を検討した。

（3）C幼稚園（岐阜県内）は障がい児がいない園で、その園児ら（年長クラス）に対して読みきかせをした。そして園児との問答や保育士へのインタビュー及び質問紙への回答を検討した。

（4）D保育所（名古屋市内）は障がい児が在園している園で、その園児たち（年長クラス）に対して読みきかせを継続的に実施した。園児との対話とインタビュー、保育士へのインタビュー及び質問紙への回答を検討した。印象についての描画は初回の1回であったが、それを検討した。

2.1.3 専門家や障がい児の家族による「絵本」の評価

障がい児の家族、小児科医、小学校・中学校教育、特別支援教育に携わっている人、コミュニケーション障がいについての研究者らに個別に「絵本」を読んでもらい、質問紙やインタビューにより、意見、感想などを得て、主な意見や感想の記述を集約し検討した。

3. 結果

3.1 絵本『ひとりぼっちのもにゃ』について

「絵本」の表紙と主な場面



3.1.1 テーマ

表面的な色や形により仲間はずれが起こりがちである。しかし「存在の尊さに違いはない」ということが理解できるように表現されている。

最近、教育・保育の場では、海外からの子どもたちが肌の色やことばや文化の違いにより、仲間はずれにあったり、いじめにあったりすると名古屋市、岐阜県の保育所でのエピソードとして聞いた。また、障がい児が変な子どもとして他の園児から偏見をもたれたりする場合もあると聞いている。いじめられたり、助けられたりするのはいつもちがいや障がいをもつ立場にあるものであろうか。誰でも助けが必要であり、お互いに助け合うことにより支えあって生きている。そのようなことが理解されるきっかけになるように願い制作した。

3.1.2 あらすじ

一つだけ、他のあおむしたちと体の色がちがう子「もにゃ」が生まれてきたが、その誕生に皆が喜びいっしょに遊んでいた。「もにゃ」といっしょにいる時、仲間が鳥にさらわれていく。色のちがう「もにゃ」のせいで、いっしょにいた仲間がおそろえやすくとみんなが言った。「もにゃ」はみんなの身を守るために自分から離れていき、ひとりぼっちになってしまった。そしてみんなさなぎになる。けれど春になって「もにゃ」もさなぎからみんなと同じ白いきれいな蝶になった時、仲間に再び会えたことを喜びあい、広い青い空にみんなで羽ばたくことができた。

3.2 絵本『ひとりぼっちのもにゃ』の保育の場での読みきかせ結果

2010年3月から2011年8月にかけての保育所、幼稚園、幼稚園での読みきかせ結果である。

3.2.1 A保育所（障がい児がいない年長児クラス22名）での保育士の意見

- ・大体は理解できている様で、もし外国人の子どもがいたら「助けてあげたい、仲良くする」などの表現が聞かれ、ちがいの理解のきっかけになった。（以前外国人の子どもが園にいた）
- ・年長児は十分理解できた様子である。もにゃを肌の色がちがう人間に置き換えることは未だ難しく、何度も繰り返し読みきかせたい。また、外国人の子どもが入ってきた場合の事前学習として使用したい。このような絵本は読む機会があまり無いので子どもたちにとっていい経験となった。

3.2.2 B幼稚園（障がい児が多数いる）での保育士の意見

・子どもには難しいと思われるが、年長児の終わり頃に仲間はずれをテーマとして扱いたいと考えている。

・何回も読みきかせの機会をもつことにより、理解が深まり日常の中で表現の仕方が変化してきた。例えば、園での英語指導のための黒人教師に園児はとまどった様子もあったが「絵本」をきっかけに理解が深まった。子どもたちは絵を読んでいくので分かりやすく、絵本の内容と体験が合わさってくれば、接し方に変化が出る。

3.2.3 C幼稚園（障がい児はいない）での保育者の意見

・これまでに「障がい」について子どもたちに話す機会もなかったのも、子どもに考えるきっかけづくりを与える良い機会になったと思う。

・年長児22名は大体の理解ができている様だが、それが障がい児や外国人と結び付けて理解するというのは子どもたちにとって難しかったようだ。

3.2.4 D保育所（障がい児は多数いる園で年長児クラス20名、2010年度までは外国人も複数いた）での保育士の意見

・一回目の（筆者の）読みきかせ後、1週間の間隔をあけて読みきかせをした。その後「もにゃ」の立場になってもにゃの気持ちについて話し合った。「みんなだったらどのようにもにゃと接するか」と問い、なかまはずれにしない方法がないか話し合った。子どもたちの反応から、同じ人でも色や形が違う子に対して仲間はずれにしたりしてはいけないと、子どもたちは理解していると思った。

・実際に読みきかせを行い、伝えることの難しさを改めて感じた。

・園で実際におおむしからさなぎ、蝶になる生態観察をした経験があるので、この絵本の理解はよくできたと思われる。

・何回も読みきかせをすると、子どもたちの理解が深まった。この絵本は相手の気持ちを考える力をもたせると感じた。

（筆者の読みきかせ後の問答で「何故もにゃの周りの青虫は鳥にさらわれやすいか？」の問いに「色のちがうもにゃの傍だと目立つから」と応える。「本当にそうなのか？」と問い直すと、「ちがう！ もにゃが目立つからじゃなくて青虫が鳥のえさだからだ」と主張する子どもがいた。5－6歳の子どもでも画一的な応答ではなくて、手持ちの経験から類推し考えて応答できる力があると子どもの能力に感心した。）

3.3 障がい児の保護者やきょうだいの感想・意見

（1）障がい児の保護者

・人は育ってきた環境や生まれつきで外見や内面が違う。みんな違うという事を認め理解する事で、お互いを分かりあえたら仲間はずれがなくなるのではないかと思った。

・自分の気持ちや立場を守ることを最優先に考えてしまうことで、仲間はずれができてしまうのではないか。人を思いやる気持ちが必要だと思った。

・「みんなと同じはいいこと」「みんなと違うこと、少数派はよくない」という考え方がこの社会にはあるように思う。それは子ども達が本能的にそう思うのか、大人や兄弟など周りの人を見てそう思うのか不明だが、「みんなと同じはいいこと」という周りの人の考え方が変化すれば、

子ども達の考え方も変わってくるかもしれないので、この「絵本」はまず周りの大人に読んで欲しい。

・最初はもにゃだけ色が違ってても皆何とも思っていなかったのに、鳥に襲われるとにもにゃのせいにしてしまった。本当はもにゃが色が違うことだけが原因じゃないかもしれないのに安易に色が違うもにゃのせいにしてしまう。ついつい自分と違うものを攻撃してしまう。そして仲間じゃないという感情が生まれてしまう。もにゃは優しい気持ちをもっていて、いい所がたくさんあるのに色が違うというだけで、知ろうともせず、その内面をみることもないのかな。それで仲間はズレにされてしまうのはかわいそうだなと思った。

（2）障がいのある弟（11歳）をもつ姉A児（16歳、高校1年）

・・・例えば、ハチが大好きで、いつもカゴにハチを入れて持ち歩いている子がいたとしたら、刺されるのが嫌だからその子のことを避けると思う。でも、もにゃのように生まれつきのことで避けるのはやっぱりよくないことだと思う。障害だけでなく、名前、見た目、髪や肌、目の色などの変えることのできないことを理由に避けるのは絶対許せない。・・・

私はこの本を、小2くらいの子に読んで欲しいと思う。なぜ小2かというと、私の記憶をたどると小2はまだ、避けるとか嫌うとか余り無かったからだ。というよりは境目だったと思う。だから、その気持ちを忘れないうちに読んで欲しい。でも、やっぱり色んな人に読んでもらいたいと思う。

3.4 教員など専門家の意見

・障がいを持つ人が実際に身近にいる、いないに関わらず、年齢、国籍や個性の違いでも、「お互いが皆ちがっているのが自然だ」という事を理解するのに役立つ絵本だと思う。（大学教員 国際関係論）

・原因と結果の関係で「違い」を原因と捉える事が、関係者にとって解決にならないという事をはっきりと伝えていることが良かった。（中学校教員）

4. 考察

（1）保育者への質問紙の回答から、年長児には「絵本」を何度も読みきかせることにより、自分とは違う他者の存在に気づきその違いを受け止めることができていく効果が期待できる。

（2）インクルージョンを進めるためには、障がい児のいない園においても、障がい児を含め違いのある存在に気づき尊重できるように「絵本」が必要であることが分かった。

（3）障がい児の家族の意見から、「みんなと違うこと、少数派はよくない」という考え方が変わる事を願い、「絵本」はまず周りの大人に読まれることが期待されている。また、障がい児のきょうだいにはちがいに對する敏感な想いと痛みがあり、周辺の理解を願いながら過ごしていることが分かった。この「絵本」は周辺の理解に繋がり、親ばかりではなく障がい児の兄弟姉妹にとっても共感でき、負担が軽減されるツールとして有効と思われる。

（4）「違いは誰にもあり、その違いを不都合な事の原因や理由にしてはならない」という観点にたって、仲間はズレを作らず仲良く共生していくことの大切さを理解してもらう手がかりとして「絵本」が期待されている。

（５）複数の園で実際におおむしからさなぎ、蝶になる生態観察の経験をしており、この絵本のストーリーの理解を助けたと思われる。絵本のあら筋を理解するために必要な知識について読みきかせの前に確認したり、必要ならば説明しておくことで理解が深まる。

（６）障がい児の保護者や現場の保育士らの意見から、「絵本」の幼児期からの導入の必要性が強く感じられた。しかし、障がいやちがいを扱った絵本は小学校中学年から大人向けのものが多く幼児が理解するための適当な「絵本」は少なく、更に多くの「絵本」の制作と普及を願う声がきかれた。

（７）小中学校の教育者、小児科医師らの意見からは「絵本」を読むと一般の子どもや大人に障がいやちがいについてのやさしい説明の仕方が示唆されるようだ。実際、若い小児科医師らが読み、障がい児の保護者が障がいを理解するきっかけとして役立つという意見があった。さらに保育者をめざす学生、一般の保護者に読まれることも期待している。障がい児施設の職員は、保護者の心の深いところで「共感」できる作品と考えて多くの保護者に読まれることを期待している。

５．ちがいについての考察

（１）人間の精神的な成長は、「外部からの刺激に対して反応する」ということを何度も繰り返しフィードバックさせることにより、適切な対応を学習していくことである。すなわち、自分以外の人との関係の中で成長していくのである。この自分以外の人、言い換えれば、自分とは異なった人との関係をいかに作っていくかということである。そのためには、自分以外の人（目の前の人、周りの人）がどんな人なのかをよく理解している必要がある。その理解があってはじめてスムーズな関係性が成り立つのである。障がいのある人はこの自分と異なっている程度が、比較的他の人と比べて大きく、客観的にもその違いがあるということであって、自分以外の人という点では全く同じなのである。

（２）色や形などの外見上分かりやすい違いを含めて、自分と他の人とはどこか違っている。人はそれぞれが接する様々な環境において、その違いを認識し、理解し、自分なりの形で受け入れていくことによって仲間はずれやいじめのない良好な人間関係を作ることができ、また自分自身も成長していくものと考ええる。しかし、何一つ同じものがない者どうしの人間に、ただ一つ同じものがある。それは「人間という存在」であるということだ。その人間は助け合って生きている。助け合わなければ生きていけない。これは違うものどうしがお互いの違いを認め、理解し、乗り越え、助け合っていく—それこそが人間であるということだと思う。

（３）不都合なでき事が起きたとき、「違い」や「少数派」はその原因として決め付けられることは歴史上においてもよく起こったことである。これは自分の身を守るための本能的なものかもしれない。しかし、その思慮に欠ける感情的な反応が、仲間はずれやいじめに繋がっていく。本当の原因を明確にしようと努力しないで、安易に他のものに責任転嫁する姿勢では、根本的な解決にはならない。「違い」を強調し過ぎたり、少数派・多数派と分けて考えることは民族問題の紛争にも通じることである。そうではなく、みんな違っていいもの同士が互いの理解を深めて助け合い、与え合い、支えあって生きていけると良いと思う。

そのことに触れてもらうために『ひとりぼっちのもにゃ』の読みきかせ後に名古屋市内のD保育所の年長児20人に「もにゃの周りの青虫はなぜ鳥にさらわれるのか？」更に「鳥にさらわ

れるのは本当にもにゃのせいかな？」と核心に迫る質問をした。その子どもたちの中に「そうじゃない！ もにゃのせいじゃなくて、あおむしは鳥の餌だからだ」と応答する子どもがいた。筆者は、子どもの中には、「もにゃが目立つから」という画一的な応答だけではなく、柔軟な発想をする子どもがいることに驚きと衝撃を感じた。このような問答の展開があれば、少しずつ理解が広がる可能性はあると思われた。

6. 今後の課題

今後の課題と方向を以下に記しておきたい。

（1）障がいの種類を広げて「絵本」を制作

専門家や障がい児の親の会等の意見から、自閉症やダウン症ばかりではなくもっと色々な種類の障がい理解の「絵本」の必要性が強く感じられた。

（2）「絵本」の効果測定と実践方法の検討

「絵本」の効果的な使い方について、実践方法やその効果を適切に評価する方法も含めて様々な角度から検討する。

（3）社会的不利な立場を理解するための絵本をジャンル別に収集し整理

社会的不利な立場を理解するための絵本をジャンル別に収集し、現場で活用しやすいように、どの年齢にどんな絵本をどんな提示方法で実践したらよいか等について整理する。

（4）「絵本」による障がい理解の基本概念（幼児期）についての探求

障がい理解の本質や意義について、「絵本」制作の実践や研究による知見に基づいて、系統的に整理し理念をまとめる。

付記：

本稿において、「しょうがい」は筆者が先の紀要に論考した「障がい」と記す。尚、条約や法律名に関してはそのまま「障害」と記し、感想・意見などについては本人の記述どおりに記した。

絵本『ひとりぼっちのもにゃ』は、平林あゆ子監修・著『障がい理解のための絵本』風間書房（2011年発行）の絵本3冊セットとかいせつと利用の手引きの内の1冊として収録されている。

